

プロジェクションマッピングに焦点を当てる光の祭典「SCHLOSSLICHTSPIELE」

(ドイツ・カールスルーエ市)

日本語で城・光・ゲームを表わす「SCHLOSSLICHTSPIELE」は、プロジェクションマッピングを紹介するカールスルーエの光の祭典です。

プロジェクションマッピングはメディアアーツのひとつで、映像作品を特定の物や建物に投影できるようにデザインしたものです。

国際的なアーティストがこのイベントのために制作した 3D 映像が数週間にわたって毎晩カールスルーエ宮殿に投影されます。

SCHLOSSLICHTSPIELE は、2015 年にカールスルーエ市の 300 周年を記念して、アート・メディアセンター施設「ZKM」の芸術科学ディレクターであるペーター・ヴァイベル氏が創設しました。

以来、夏季に継続的に実施されており、2022 年までの累計来場者数が 170 万人を記録する人気のイベントとなっています。

イベントでとりわけ注目されるのは、来場者とプロジェクションマッピングの相互作用です。来場者はゲームや動きによって、アーティストが考案した演出の一部になります。

また、2021 年にカールスルーエの銀行「BBBank」との協力により、「プロジェクションマッピングにおける BBBank 新人アワード」が創立され、3つの賞が設けられました。全受賞者が次回の祭典で作品を披露する権利を得る他、1位受賞者には 10,000 ユーロと制作費、2位には 5000 ユーロ、3位には 2000 ユーロが与えられます。

2022 年の新人アワードには、メキシコ、タイ、オーストラリアなど、世界中から 75 作品の応募があり、フランスを拠点とするグループ Atelier v3 の作品「Resilience」(=耐

性) が1位に選ばれました。この作品は、強さと脆さの間にある自然のバランスに焦点を当て、汚染や地球温暖化の結果について問いかけています。SCHLOSSLICHTSPIELE デジタル版にて作品をご覧ください。

2023年の新人アワードでは、インドネシアの The Fox, The Folks グループの作品「BHINNEKA EXPRESS」が1位を受賞しました。この作品は、SCHLOSSLICHTSPIELE2023のテーマである「未来への展望と社会的結束の議論」を反映し、インドネシアの文化に溢れています。モチーフである色とりどりのライオンが目の前で踊り、インドネシアの標語「Bhinneka Tunggal Ikka」(=多様性の中の統一)に言及しています。デジタル化やグローバル化など、絶え間ない変化の通過点をどう生き抜くか、チームの解釈をアートで具現化した作品です。

受賞作は、2023年8月に開催される SCHLOSSLICHTSPIELE2023にて見ることができます。